

# 令和三年度一般選抜（前期日程） 「国語」 解答例

「一」

問一 ①威嚇 ②ふし ③輪郭／輪廓

問二 響き（音素）

問三 実感

問四 言葉を取り払うことで自他未分化の原初的世界に没入したのち、あらたな言葉を与えて世界の対象化をはかる。（五〇字）

問五 名辞以前の「もの」の世界では失われるはずの言葉が、その響きを視覚化してつなげられることで、世界を再統合する実体として存在することを示すから。（七〇字）

問六 言葉の「もの」化、「もの」の言葉化という局面を迎えている現代では、「言葉」は物質性を帯びて感情につながる響きをなくし、「もの」は概念によって分割されることで、その実感を失う怖れがあると考えられるから。（一〇〇字）

問一 ①お互いに ② どうして(なぜ) ③ どうしようもなく ④ 体裁が悪く

問二 こそ

問三 夕霧(冠者の君・男君)

問四 夕霧(冠者の君・男君)の、雲居雁に対する、恋しいと思う気持ち

問五 私の袖はあなた(雲居雁)を思って流す血の涙で、五位の袍の色である紅色に深く染まっているのに、あなたの乳母は、六位である私の袖を卑しい浅葱色だとあざけているのでしょうか。

問六 夕霧の乳母は夕霧の恋に同情的であり、大宮を説得して、夕霧と雲居雁が会う機会を作らせる。雲居雁の乳母は、夕霧が東宮とは比較にならない六位という低い身分なので気に入らず、二人の恋に不満で反対している。(九八字)

問一 ④ もし ⑤ おもへらく

問二 (一) ヲシテ (二) ア

問三 まさにすべからくちかひをたつべし

問四 不<sub>レ</sub>置<sub>二</sub>側室及女奴<sub>一</sub>、則可<sub>レ</sub>為<sub>レ</sub>婦

問五 余媚娘はまた玉色繪を作ることでもでき、その素晴らしさに比肩できるものはなかった。

問六 陸希声が余媚娘に結婚を申し込んだ際に、自分以外の女性を置かないことを約束したにも関わらず、その約束を破つて他の女性を連れてきたから。(六六字)

※問一⑤について、「歴史的仮名遣い」(おもへらく)か「現代仮名遣い」(おもえらく)かは不問。